

平安期女房装束の着装体験記

古川 陽子

二〇二三年五月、実践女子大学の研究ブランディング事業として再現された、平安期女房装束の着装を行った。本稿では、再現された女房装束の着装体験を、主に現代の装束と比較を行いながら述べる。

（比較に関する部分において、本稿内では再現された女房装束を再現装束、現代の装束を現代装束とする）

はじめに袴を身に着ける。現代装束の長袴では体にフィットさせ、しっかりと腰ひもを着付けたが、再現装束では腰紐はゆるく着付ける程度のため、着付けている感覚は薄い。

現代装束との大きな違いは感じられず、歩いたり立っている状態から座ったりする時の動作に特別意識したところはない。

単についても袴と同様に再現装束ではしっかりと着付けはせず、羽織るのみであった。肌触りが良く、重さはほぼ感じられなかった。また、再現装束の単の内側は滑りがよく、気を付けていないとすぐに位置が変わったりはだけた

りした。

次に、重桂などをあらかじめ重ねあわせた状態としておき、着装した際の差異についてである。

現代装束では前衣文者・後衣文者に体へ装束を着せられた際、肩回りに重みを感じ、かなり重量があるような感覚がする。対して再現装束では、体が下に引かれるような感覚は薄く、肩への重みを感じるのみであった。

これは装束そのものの重さも関係するものであるが、加えて再現装束では可動域が広いことも要因の一つであろうと思われる。

具体的に述べると、現代装束の場合はしっかりと着付けられるため、肩から上腕付近の布が硬いように感じられ、あまり体を動かすには向いていないように思うが、再現装束では特に肩回りが動かしやすく、腕も前や対角へ伸ばすことが比較的容易で、動かすことの可能な範囲も広がった。そのために感じられる重みが軽減されていたのではないかと推測する。

個人の感覚による部分が強く生じ得るところで恐縮ではあるが、現代装束と比較すると再現装束は重さが七割程度に感じられた。

しかしながら、午前中から夕方ごろまで装束を着用したのち、翌日には肩に軽度の筋肉痛を感じた。適切に休憩をしながらの着装であっても肩への負担は生じていたようで、再現装束もある程度の重さはあるようである。

再現装束の特徴として大きく感じられたのは、着装時の扱いの違いと着心地の良さである。

前述の通り、再現装束はかなり動かしやすく、同時に現代装束よりも軽くなめらかで、体から滑ってしまうほどのものであった。

単の滑りやすさと重桂の動きやすさを考えるに、単の下へ何も着ていなかった場合には、気を配るよう心掛けなければ、かなり胸元が見えてしまっていたように思う。実際のところ、座ったまま足を組みなおすとか、腕を袖から抜いて胸元へ持っていくといった際には、肩から後ろへ装束が落ちてしまいそうな感覚を得たり、単の衿が開いてしまいい押さえる必要が生じたりした。

着心地に関しては、とても暖かく、同時に大変快適であった。

着装を行ったのは五月上旬の室内で、特別暑くも寒くもなく丁度よい気温と湿度であった。

再現装束を身に着けると、次第に装束内が暖かくなった。暖かさを実感しつつも、汗をかくことはなく、不快になるような熱さではなかった。また、暖かさが蓄積されて熱くなるという訳ではなく、装束内は一定の温度に保たれていた。

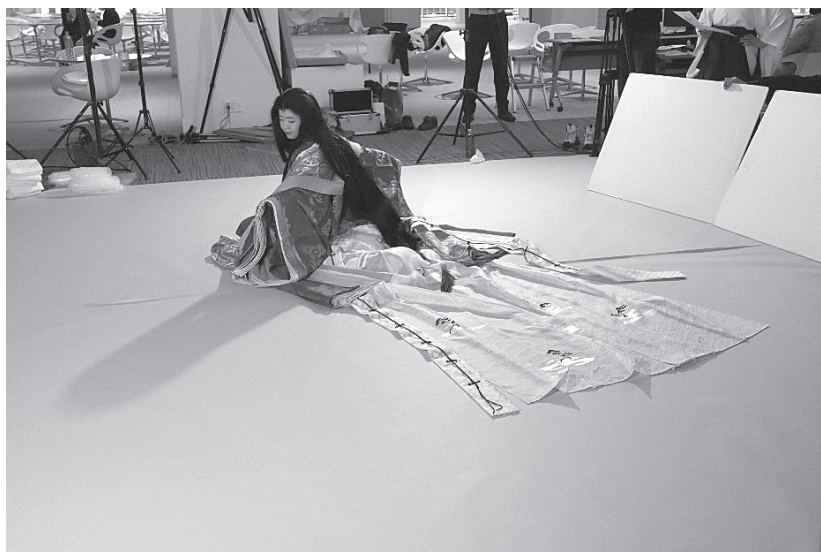
体を横にして寝そべり装束に包まれるような姿勢をしばらく続けた際にも同様であったため、かなり通気性が良いのだらうと思われる。

座った状態にいる時には暖かい装束を身にまとっているという感覚が強いが、特に寝そべったような体制でいると、装束の重さも加わり、まるで掛け布団を纏った状態で敷き布団のなかへいるような、冬場の寝具に似た感覚を得た。ある程度は重みがあるため一晩寝てしまうと翌朝に多少の疲れが残るだろうけれど、装束を着用した状態で横になり休む程度のことはできるのではないかと考えた。

また、着装時に絵巻に描かれた女性と同じ体制の再現を行った。印象に残っているのは、手を横に広げ、振り向くようなポーズのことである。（次ページ：図①、図②）



図①



図②(図①を横から見た様子)

横に手を広げる状態は、腕に装束の袖の重みが伝わり、長く持ち上げておくことは難しかった。加えて、図①では軽く左を向いているように見えるが、腰と首を曲げられうる限界まで左を向けており、伴って右腕はかなり右へ大きく開いている。

図②は横から同ポーズを見た際のものである。装束のなかで体のみを動かすことが可能なため、見た目にはほぼ現れていないが、左を向いていることが分かる。

なお、着装して座っている状態では、自身で扱えるのは体の前面のみに限定されていた。現代装束と共通する点であるが、袖の存在により全くの背面はもちろんのこと、斜め後ろもあまり見えていない。

また、裳は前側へ小腰が回っている場合には自分の視界からその存在が確認可能だが、それ以外に自身が身に着けているのか判断が難しかった。

一方で装束の内側では腕の動きが自由である。再現装束は生地が柔らかいため、袖を通して腕を出すことも可能であり、反対に袖から腕を抜いて単の襟のあわせから手を外へ出すことも容易に可能である。

ここまで、再現装束を着装した際の所感を主として述べてきた。着装した様子をご覧になった先生方から見ると、他にも着装時の様子から得られる観点が多く存在したとと推察するが、着装した際の体験を感覚的な視点から考えた場合に大きく記憶に残っているのは、その着心地の良さと扱いやすさであった。

（実践女子大学文学部平成十九年度卒業生）